



世界文学全集 13

ユゴー

レ・ミゼラブル

I

井上究一郎 訳

世界文学全集 13 ユゴー I



© 1963

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和36年11月25日 初版発行
昭和38年11月20日 10版発行

定価 320円

訳 者 井上 究 一 郎
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 堀 鉄 判
装 幀 原 弘

印 刷：株式会社 文 弘 社
製 本：中西製本株式会社
本文用紙：日本紙業株式会社
同 納 入：東邦紙業株式会社
クロース：日本クロス工業株式会社
同 納 入：株式会社 小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

レ・ミゼラブル I

第一部 ファンチーヌ

第一編 正しい人……………六

一 ミリエル氏……………六

二 ミリエル氏ビヤンヴニユ閣下とな
る……………八

三 よい司教につらい司教区……………三

四 言葉にふさわしい行為……………五

五 ビヤンヴニユ閣下がその通常服を
べらぼうに長もちさせていたこ
と……………三

六 彼はだれに家をまもらせていたか……………四

七 クラヴァット……………三〇

八 一杯きげんの哲学……………三三

九 妹の語った兄……………三三

十 司教未知の光に直面……………四一

十一 一つの限界……………五三

十二 ビヤンヴニユ閣下の孤独……………五七

十三 彼の信仰……………六〇

十四 彼の思想……………六四

第二編 失 墜……………六七

一 一日歩いたその晩……………六七

二 高德の人に戸じまりの説法……………七六

三 おとなしい服従の雄々しさ……………八一

四 ポンタルリエのチーズ製造所の話……………八六

五 平 静……………九〇

六	ジャン・ヴァルジャン……………	九一
七	絶望の底……………	九六
八	波と闇……………	一〇三
九	新たな被害……………	一〇五
十	目をさました男……………	一〇六
十一	彼の行為……………	一〇九
十二	司教の尽力……………	一一二
十三	プチ・ジェルヴェ……………	一二五
第三編	一八一七年のこと……………	一二四
一	一八一七年……………	一二四
二	ダブル・クワルテット……………	一二〇
三	四人と四人……………	一二五
四	トロミエスは上きげんになってス ペインのシャンソンをうたう……………	一二元
五	ボンバルダ軒……………	一二四
六	うぬぼれの章……………	一二三
七	トロミエスの思慮分別……………	一二五
八	馬の死……………	一二二

九	歓楽のたのしいおわり……………	一二四
第四編	委託は時として譲渡とな る……………	一二五
一	ある母と母との出あい……………	一二五
二	うさんくさいふたりの人物の最初 の素描……………	一二六
三	「ひばり」……………	一二六
第五編	転落……………	一二二
一	黒ガラス玉製造の改良にまつわる 話……………	一二二
二	マドレーヌ……………	一二三
三	ラフィット銀行へあずけた金額……………	一二五
四	喪服のマドレーヌ氏……………	一二六
五	地平のかすかな稲光り……………	一二〇
六	フォーシュルヴァンさん……………	一二六
七	フォーシュルヴァンはバリで庭番 になる……………	一二九
八	ヴィクチュルニアン夫人は堅気し……………	一二九

らべに三十五フランを費やす……………	一四〇
九 ヴイクチュルニアン夫人の成功……………	一四二
十 成功のつづき……………	一四五
十一 「キリストはわれらを救った」……………	二〇〇
十二 バマタボワ氏のあそび暮らし……………	二〇二
十三 市の警察に関する数項の問題の解決……………	二〇三
第六編 ジャヴェール……………	
一 安息のはじめ……………	二二三
二 ジャンがシャンとなる顛末……………	二二七
第七編 シャンマチウ事件……………	
一 サンプリス修道女……………	三三六
二 スコーフレール親方の活眼……………	三三九
三 脳裏の嵐……………	三四四
四 睡眠中にあらわれた苦悩の形象……………	三五三
五 故 障……………	三五五
六 試験に立つサンプリス修道女……………	三六六
七 到着した旅の人がふたたび出発の	

準備をする……………	二七三
八 特別入場……………	二七八
九 有罪の認定がなされつつある場所……………	二八一
十 否認の方式……………	二八七
十一 ますますあっけにとられるシャンマチウ……………	二九四
第八編 反 撃……………	
一 マドレーヌ氏はどんな鏡に映してその髪をながめるか……………	二九八
二 しあわせなファンチヌ……………	三〇三
三 満足したジャヴェール……………	三〇六
四 官憲がふたたびその権力をとりもどす……………	三〇九
五 ふさわしい墓……………	三二三

第二部 コゼット

第一編	ワテルロー……………	三〇
一	ニヴェルからくる道で見かけるもの……………	三〇
二	ウーゴモン……………	三二
三	一八一五年六月十八日……………	三七
四	A……………	三〇
五	戦局をおおう「暗い何物か」……………	三一
六	午後四時……………	三四
七	上ぎげんのナポレオン……………	三七
八	皇帝は道案内のラコストに質問する……………	三四
九	意 外……………	三四
十	モン・サン・ジャンの高地……………	三四
十一	ナポレオンにはわるい道案内、ピユーローにはいい道案内……………	三五
十二	近衛隊……………	三五

三	破 局……………	三五
四	最後の方陣……………	三七
五	カンブローズ……………	三五
六	指揮官の評価はどうか？……………	三六
七	ワテルローを是認していいか？……………	三六
八	神権説の再興……………	三七
九	夜の戦場……………	三七
第二編	軍艦「オリオン号」……………	三七
一	二四六〇一号が九四三〇号となる……………	三七
二	悪魔がつくったと思われる二行の詩句の読みとれる場所……………	三七
三	足輪の鎖が金槌の一打ちでこわれてしまったのは、前もって何か工作がしてあったにちがいないということ……………	三八

第三編 死んだ女への約束をはたす

一 モンフェルメイユの飲料水の問題	三九二
二 ふたりの人物像の仕上げ	三九五
三 人には酒がいるし馬には水がいる	四〇〇
四 人形の登場	四〇三
五 少女ただひとり	四〇四
六 プーラトリュエルの勸はあたって	四〇九
七 闇のなかで見知らぬ人とならんだ	四一四
八 金持ちとも貧乏人ともわからない	四一七
九 テナルディエのかげひき	四三四
十 欲ばりすぎるとばかを見ることがある	四四三

九四三〇号はふたたびあらわれ、

コゼットはうまくその番号にあたる

四四八

第四編 ゴルボー屋敷

一 メートル・ゴルボー	四四九
二 ふくろうとほおじろとの巣	四五五
三 ふしあわせなふたりがいっしょになつてしあわせをつくりあげる	四五七
四 借家人頭のばあさんの見てとつたこと	四六一
五 五フラン銀貨がゆかに落ちて音をたてる	四六三

第五編 闇の狩りには無言の猟犬

一 計略のジグザグ	四六六
二 さいわいなことにオーステルリッ	四六六
ツ橋は車を通して	四七〇

三	一七二七年のパリの地図を見よ……………	四七一
四	手さぐりの逃走……………	四七四
五	ガス灯がついていたらできないだ ろう……………	四七六
六	謎のはじまり……………	四八〇
七	謎のつづき……………	四八三

八	謎は深まる……………	四八四
九	鈴をつけた男……………	四八六
十	ジャヴェールがまんまと獲物をと りにがしたのはどういうわけか ……………	四九〇

訳者のノート……………	四九九
-------------	-----

レ・ミゼラブル
I

社会に法律と風習とによる処罰が存在し、それがこの文明のただなかに人爲によって地獄をつくりあげ、神聖な運命を人間の不幸でもつれさせるかぎり、——またこの世紀の三つの問題、すなわち、プロレタリアであるために男が落伍し、飢えのために女が墮落し、闇夜のために子供がいじけるといふ三つの問題が解決されないかぎり、——また、ある地域で社会の窒息状態が生じる可能性のあるかぎり、——言葉をかえれば、そしてもっとひろい見方をすれば、この地上に無知と悲惨とがあるかぎり、このような性質の本もまた役に立たないだろう。

オートヴィル・ハウス、一八六二年一月一日

主要人物

ジャン・ヴァルジャン ファヴロールの枝切り職人。貧しさと飢えのために一きれのパンをぬすんでとらえられ、トゥーロンの徒刑場に送られる。脱獄を重ね、十九年間の刑期をおえて放免。その年、一八一五年が物語の発端。彼は誕生してモントルイユ・シュール・メールの市長マドレーヌ氏となるが、ふたたび闇の世界にはいる。のちルブラン氏とも言われ、ユルチーム・フォーシュルヴァンとも変名する。物語は彼の生涯をめぐって展開、その死によっておわる。本書の主人公。シャルル・フランソワ・ビヤンヴニユ・ミリエル デイ・ニューの司教。高德のはまれ高く、徒刑囚ジャン・ヴァルジャンに大きな精神的影響をあたえる。

パチスチーヌ ミリエル司教の妹。老嬢。

マダロワール ミリエル司教とその妹に仕える老女中。

ブチ・ジェルヴェ 煙突掃除などをして各地を放浪するサヴォワの少年。

ルイ十八世 正統王朝派の国王。フランス大革命で死刑となったルイ十六世の次弟。一八一四年ナポレオン失

脚後王位にのぼる。一八一五年ナポレオンの百日天下のち重祚。一八二四年没。弟シャルル十世がそのあとをつぐ（一八三〇年まで）。王政復古期の国王。

ファンチーヌ モントルイユ・シュール・メール出身の孤児。パリの通勤お針女。男にすてられ、郷里で女工、ついで売笑婦となり、マドレーヌ氏の診療所で病死する薄幸の女。コゼットの母。

フェリックス・トロミエス ファンチーヌを誘惑してすてさる不良なパリの大学生。

コゼット ファンチーヌとトロミエスとのあいだに生まれた私生児。孤児となり、田舎にあずけられ、「ひばり」と呼ばれ、虐待される。ジャン・ヴァルジャンに救われ、パリに出ていわばその娘となる。ラノワール嬢とも呼ばれ、のちに幸福な結婚をする。

テナルディエ夫妻 モンフェルメイユの安宿屋の主人。

夫妻とも冷酷で食欲。男はワテルロー軍曹と称しているが、うしろ暗い過去をもつ。コゼットをあずかり虐待する。一家はのちパリに出て下層民となり、男はジ

ヨンドレットと称する悪党となる。

ジャヴエール ジャン・ヴァルジャンを徹底的に追っかけてやまない廉潔で無慈悲な警視。

フオーシユルヴァン モントルイユ・シユール・メールで車の下敷きとなり、マドレーヌ氏（ジャン・ヴァルジャン）に救い出される。のちパリで女子修道院の庭番となり、ジャン・ヴァルジャンを献身的にかばう。ジャンマチウ 誤ってジャン・ヴァルジャンと見なされ、処刑されようとする老人。

ナポレオン・ボナパルト ワテルローの会戦についての作者の回想に登場する。

イノサント女修院長 常時聖体礼拝のル・プチ・ピクピュス女子修道院長。

マリユス・ボンメルシー ナポレオンによって男爵をさづけられた軍人を父とし、パリのブルジョワの娘を母として生まれた孤児。ナポレオンを崇拜し、大革命の思想に共鳴し、王党派の祖父のもととびだして、革命運動に身を投じる。作者の若い日の一分身。コゼットの恋人となり、バリケードからジャン・ヴァルジャンに救い出され、やがて祖父にゆるされて結婚する。

ジョルジュ・ボンメルシー マリユスの父、勇猛果敢な陸軍大佐。ナポレオン皇帝に献身し、ワテルローの戦場でテナルディエに救い出される。王政復古後、家族とひきはなされて孤独のうちに死ぬ。

リユック・エスプリ・ジルノルマン マリユスの祖父。女好きの社交人で通じたブルジョワの老人。頑固な王党派。その長女は独身、次女はボンメルシーの妻となり、マリユスを生んで死ぬ。マリユスはこの老人とその長女の老嬢とにそだてられた。

エポニース
アゼルマ } テナルディエ夫妻の娘。

ガヴロッシュ テナルディエ夫妻の息子。家庭の愛うすく、パリの浮浪児の群れに投じる。

ルイ・フィリップ王 オルレアン王朝派の国王。一八三〇年の七月革命によってフランス国民の王となる（一八四八年の二月革命まで）。七月王政期の国王。

マブーフ サン・シユルピス教会堂の教区財産管理委員で、植物研究家。マリユスに好意をよせている老人。テオデュール ジルノルマン氏の甥の子、長女のジルノルマン嬢に可愛いがられる陸軍中尉。

第一部

ファンチーヌ

第一編 正しい人

一 ミリエル氏

一八一五年に、シャルル・フランソワ・ビヤンヴニユ・ミリエル氏はディーニユの司教だった。七十五歳にもなろうという老人で、一八〇六年以来ディーニユの司教職についていた。

そのいきさつは、これからの物語の内容そのものに何の關係もないのだが、彼がこの司教区に着いたところに、彼のことでひろがったうわさや話題をここにあげるのは、すべてに正確であろうとするにすぎないとはいえ、まんざら無用ではないだろう。真実にせよ、うそにせよ、他人について言われていることは、その人の生涯に、またとりわけその人の運命に、しばしば実際のおこないとおなじほど多くの場所をしめているものだ。ミリエル氏はエクス的高等法院の評議員の息子であった。高貴な法官の家柄である。彼について語られたところによると、その父は、自分の職のあとつぎにするつもりで、高等法院の家柄にかなりひろくおこなわれていた習慣に

したがって、彼を非常に早く、十八歳か二十歳のときに、結婚させてしまったのであった。シャルル・ミリエルは、そうした結婚にもかかわらず、多くのうわさの種をまいたということだった。彼は風采がりっぱだった、どちらかといえば小柄なのだが、粹で、品がよくて、才気があった。はじめのころの生活は社交と情事とにわけられた。そこへ大革命がやってきた、事件がやつぎばやに起こった。高等法院の家柄の人たちは、殺され、追いたてられ、追いつめられ、四散した。シャルル・ミリエル氏は、大革命のはじめのころから、イタリヤに亡命した。彼の妻は、以前からかかっていた胸の病氣のために、そこで死んだ。夫婦には子供がなかった。ついでミリエル氏の運命には何が起こったか？ フランス旧社会の崩壊、彼自身の一家の没落、九三年（一七九三年）の悲劇的な光景、——高まる恐怖のために遠方からながめる亡命者たちにとって、おそろくいっそうおそろしかったであろう光景、そうしたものが、彼の内心に、俗世をすてて孤独にのがれるという考えを芽ばえさせたのであろうか？ 世の中の大變動に生活と財産とをうばわれながらびくともしない人、そのような人をも時としてその心を打って転倒せしめるあの神秘なおそろしい打撃の一種に、彼はそれまでの生活をしていた気晴らしと愛情とのただなかで、急におそわれたのであろうか？ だれも

それを言うことはできなかったであろう。知られていたことといえば、彼がイタリヤからかえってきたとき、司祭になっていたということだけである。

一八〇四年に、ミリエル氏はB（ブリニョル）の主任司祭だった。すでに年とっていて、奥深い隠遁いんどんのなかに生活していた。

戴冠式のころ（ナポレオン皇帝の戴冠式、一八〇四年十二月）、何であつたかもうよくはわからないが、主任司祭の職務上のちよつとした用件で、彼はパリに出かけた。いろんな有力者のなかでも、彼はフェーシエ枢機卿（ナポレオンの叔父でリヨンの大司教、ピウス七世について戴冠式に列した）のところへ、教区民のために請願に行つた。皇帝が叔父の枢機卿を訪問にきていた日のことだが、ひかえ室に待つていたこの風格のある主任司祭は、ちやうど陛下の通るところに行きあつた。ナポレオンはこの老人に何か特別な関心で注目されているのを知つて、ふりかえり、突然こう言つた、

——「そこで余に注目しているじいさんは何者か？」

——「陛下」とミリエル氏が言つた、「あなたはじいさんに目をとめられ、わたくしは偉人に目をとめました。どちらにも御利益ごりえきがありませんよう」

皇帝はその晩すぐ枢機卿にこの主任司祭の名をきき、それからまもなくミリエル氏は自分がディーニユの司教に任ぜられたのを知つてひどくおどろいた。

いったい、ミリエル氏のはじめのころの生活について言われている話では、何がほんとうなのか？ だれも知らなかった。大革命以前のミリエル家を知つていた家族はほとんどなかったのである。

ミリエル氏は小さい町に新しくきた人のすべてがこうむる運命にしたがわなければならなかった。そういう町では、口のうるさい連中は多いが、頭で考える人間はほとんどいないのである。彼は司教であつたが、いや司教であつたからこそ、そうした運命にしたがわなければならなかった。だが、要するに、彼の名をめぐる話題は、おそらく単なる話題にすぎなかったであろう。うわさであり、むだ口であり、軽口というものであろう。軽口というよりもむしろ、南の地方のどぎつい言葉でいうところの「阿房口あほうぐち」であらう。

それはともかくとして、ディーニユに司教職でとどまつて九年たったいまでは、最初小さい町で身分の低い人たちのあいだの会話の種となるそうしたうわさ話のすべては、深い忘却のなかに没しきつた。だれひとりそれを話そうともしなければ、だれひとりそれを思いだそうともしなかっただろう。

ミリエル氏がディーニユにやつてきたとき、ひとりの老嬢をつれていた。パチスチヌ嬢といつて、彼の妹で、彼よりも十歳年下だった。

ふたりには召使としてパチスチヌ嬢と同年の女中がひとりいるきりだったが、それはマグロワール夫人と呼ばれ、「主任司祭殿の女中」の身分から、いまでは老嬢の小間使と司教閣下の家政婦とをかねた二重の肩書きをもっていた。

パチスチヌ嬢は長身で、顔色の青い、やせた、おとなしい人間だった。彼女は「尊敬すべき」という言葉のあらわす理想を地で行ったような女だった。というのは、女性が尊敬される上に慕われるためには母親でなくてはならないように思われるからだ。彼女は美しかったことは一度もなかった。これまで教会の仕事の連続でしかなかったその生涯は、いつのまにか彼女の身に一種の白さと輝きとをそえるようになってしまった。年をとるにつれて、善意の美しさでもいうものをおびるようになった。若いときのやせたからだの感じは、成熟すると、透明体のようになった。そうした透きとおったからだから天使が見えた。それはひとりの処女であるというよりも、それ以上に一つの魂であった。彼女の身柄は影でできているようだった。その肉体はそこに性がいいるだけの余裕がほとんどなかった。何か、ある光をふくんだわずかな物質、いつもふせている大きい目、魂が地上にとどまっているためのよりどころなのだった。

マグロワール夫人は背が低くて、色の白い、脂肪ぶと

りの、いそがしそうなおばあさんで、一つにはよくはたらくために、つぎには喘息のために、いつも息ぎれがしていた。

その到着の日、ミリエル氏は、司教を旅団長のすぐつぎに位させる勅令によって定められた名譽の待遇を受けて、その司教館におさまった。市長と市会議長とがまっさきに彼を訪問し、彼のほうは、將軍と知事とをまっさきに訪問した。

着任がおわると、市はその司教が仕事にかかるのを待った。

二 ミリエル氏ビヤンヴニユ閣下となる

ディーニユの司教館は公立慈善病院となっていた。

（十八世紀）司教館はひろい美しい石造りのやかたで、前の世紀のはじめにアンリ・ピュジェ閣下によって建てられた。これはパリ大学の神学博士で、シモールの大修道院長であり、一七二二年にディーニユの司教となった人である。このやかたはいかにも教区の長にふさわしい住居であった。すべてに堂々たる風格があった、——司教の部屋、客間、居間、フィレンツェの古い様式にならった、アーケードつきの歩廊のある、すばらしくひろい中庭、大きい木々の植わった前庭。一階にあって前庭を見わたすこの長いみごとな回廊状の食堂で、一七一四年七